

生物多様性

花王の事業は、製品のライフサイクル全般にわたって、地球上のさまざまな生態系、生物の多様性がもたらす豊かな恵みによって支えられています。

世界共通の喫緊の課題のひとつである生物多様性の劣化を防ぐために、花王は、持続可能な原材料調達や、限られた原材料を有効に活用するための新しい技術開発等を精力的に推進しています。また、事業活動による生物多様性への影響を最小化すると共に、事業拠点のある地域の生物多様性の向上につながる社会活動も推進しています。また、海洋プラスチック問題をはじめ、すでに汚染されてしまった環境の回復にも取り組んでいます。花王は、生活者やサプライヤーほか、ステークホルダーとのエンゲージメントを進めると共に、製品やソリューションの提供を通して、生物多様性の保全と回復、そして自然の再生に貢献してまいります。

社会的課題

生物多様性戦略計画2011-2020および愛知目標の達成状況について分析した地球規模生物多様性概況第5版 (Global Biodiversity Outlook 5: GBO5)が、2020年9月15日に生物多様性条約事務局により公表されました。ほとんどの愛知目標についてかなりの進捗が見られたものの、20の個別目標のうち、完全に達成できたものはひとつもないことが示されました。

現在の経済活動は、貴重な自然資本の消費の上に成り立っているという一面があります。また、人間による自然や生物多様性を損なう行為が、これまでになかった動物と人との接触を引き起こし、新たな感染症が生まれるというリスクが顕在化してきました。これら諸問題の解決が企業にも求められています。

そして、いまや生物多様性と気候変動は、互いに関連し合う双子の課題であり、同時に解決しなければならない課題であることが、世界の共通認識となってきています。

世界経済フォーラムが2022年に公表した、今後10年の深刻なグローバルリスクに関する報告書でも、生物多様性の問題を気候変動への対応の失敗や異常気象に次ぐ3位に挙げています。

これらの現状と反省を踏まえて、2022年12月の国連生物多様性条約の第15回締約国会議(COP15)で、2030年までの新たな世界目標「昆明・モントリオール生物多様性枠組」が採択されました。

2050年ビジョンである自然と共生する社会をめざして、前回の愛知目標と比べて、数値目標が数多く取り入れられると共に、企業や生活者を含めた、社会全体として取り組むべき目標が定められたのが特徴と捉えています。加えて、事業者に対して、生物多様性に関する評価と情報開示が促され、生物多様性に関する意思決定に、先住民族、女性、若者の権利保護に関する項目が加わっているというのも注目すべき点です。

国際社会の一員として、ここで定められた目標は必ず達成されなければならないという強い危機感を持って、生物多様性の保全と回復、そして自然の再生に向けた活動に取り組む必要性を私たちは強く認識しています。

花王は、パーム油をはじめとする原材料調達から、研究開発、製造、使用、使用後の廃棄に至るまで、多くの生物資源の恩恵を受けて事業を行っています。世界の生物多様性の劣化は、事業の発展と持続性に大きく影響します。研究開発においては、自然や、生物の生きる知恵をヒントに開発される技術もあり、これもまた、生物多様性から受

ける恩恵であると捉えています。また、花王が製造、販売する製品の多くは、使用後に水と共に環境中に排出された後、最終的には自然の力で浄化され、あるいは、プラスチックに代表される包装容器は、時に不適切な形で廃棄されて、環境を汚してしまうことがあります。このように、製品のライフサイクルのすべてのプロセスにおいて生物多様性への配慮が必要であることを強く認識しています。

持続可能な原材料の調達プロセスを確立することも重要です。花王はRSPO 認証パーム油の購入を機に、10年以上にわたり、アブラヤシ生産地における森林破壊とそれに伴う生物多様性の損失、現地で暮らす人々や農園労働者の人権侵害等の諸問題に向き合ってきました。これまでに獲得した知見や人的ネットワークを最大限に活かし、花王の事業に関連するすべての自然環境やステークホルダーに対してポジティブな影響をもたらす未来をめざしていきます。

方針

世界は今、自然や生物多様性に対する悪影響を減らすと共に、ポジティブな影響を与える行動を増やし、生物多様性を損失から回復へと反転させることをめざしています。

生物多様性 GRI304-2

昆明・モンリオール生物多様性枠組には、2050年ビジョンとして「自然と共生する社会」を挙げています。これは、花王 way に掲げる使命、「豊かな共生世界の実現」と、正に共通するビジョンです。

2022年12月のCOP15に先駆けて2022年4月に改訂した「生物多様性の基本方針」では、めざす方向性と共に、8つの方針を掲げました。


すなわち、私たちは、日々をこころ豊かに過ごし、社会のために思いやりのある選択をすることで、すこやかな地球を未来へとつなげていく。そんな暮らし方 (Kirei Lifestyle) を実現すること、自然や生物多様性への依存と影響を最小限に抑え、その恵みを最大限に生かすことで、人と社会、地球に対する価値を最大化すること、今失われ続けている生物多様性を保全し、回復させ、自然の再生へとつなげていくことをめざしています。

そして、

- ・バリューチェーン全体での事業と生物多様性との関わりの把握
- ・生物多様性に与える影響の最少化
- ・独自の技術開発の推進と実装
- ・国際的な取り決めの遵守
- ・地域生態系を損なうことのない事業活動
- ・社内外の関係者の意識向上と情報共有による協働の効果の最大化
- ・社外関係者と連携し、生物多様性の保全と回復、そして自然を再生へと導く行動を取ること

・人・自然と化学の共生をめざすの方針のもと、活動を推進してまいります。

「生物多様性の基本方針」の改訂を機に、これまで行ってきた「生物多様性保全の活動」を継続すると共に、活動のレベルアップや新たな活動を行ってまいります。

 **生物多様性の基本方針**
<https://www.kao.com/content/dam/sites/kao/www-kao-com/jp/ja/corporate/sustainability/pdf/biodiversity-basic-policy.pdf>

生物多様性保全の活動事例
https://www.kao.com/content/dam/sites/kao/www-kao-com/jp/ja/corporate/sustainability/pdf/eco_activities_03_04_02_001.pdf

戦略

リスクと機会

リスク

花王における主要な原材料として、パーム(核)油や紙・パルプが挙げられます。パーム(核)油は界面活性剤へと変換され、シャンプーやボディソープなど、花王が製造・販売する多くの洗浄剤に配合されることとなります。また、パルプは花王の主要製品のひとつであるサニタリー製品(おむつ、生理用品など)における主要な原材料のひとつです。

今後のグローバル規模での人口増加や経済の発展によって洗浄剤やサニタリー製品の需要が伸びれば、主要な原材料であるパーム油や紙・パルプの需要もまた

ます増加すると考えられます。

生物多様性や人権侵害等の諸問題に配慮した持続可能な原材料の調達には付加的なコストが発生します。しかし、その調達において持続可能性への配慮がなされなければ、将来の長きにわたっての調達ができなくなる、あるいは、企業のレピュテーションの著しい低下により、事業存続が困難になるリスクが想定されます。

また、包装容器を含め、製品が消費された後にリサイクル・再利用することなく廃棄されてしまうような直線型経済を続けていくと、資源のより一層の消費と、環境への流出による生物多様性への影響が増え続けるという状態が続いていくことになります。私たちは、資源循環型経済への移行と共に、より少ない資源でより高付加価値な商品を提供することが求められます。

機会

花王は2011年に「生物多様性保全の基本方針」を定め、持続可能な原材料調達や生物多様性保全に貢献する新しい技術開発等に取り組んできました。そして、2022年4月、「生物多様性の基本方針」を改訂し、Kirei Lifestyleの実現と共に、生物多様性の保全から回復、再生へと踏み出すことを決意しました。KLPの実践と「生物多様性の基本方針」に沿った活動を行うことで、自然や生物多様性の損失およびそれに伴い発生するビジネス上のリスクを最少化し、さらにはそこから生まれた製品、技術、各種活動は、新たなビジネスチャンス

生物多様性 GRI304-2

につながると考えています。

例えば、2021年6月に改訂した「お取引先とのESG推進活動」では、パーム油や紙・パルプの原産地における森林破壊ゼロの確認を進めること等を目標に定め、将来に渡る持続的な原材料調達を実現するための具体的な活動をお取引先と共に推進することにより、事業継続の可能性を高めています。

また、花王が開発した界面活性剤「バイオIOS」は、食料には不向きな固体油脂を活用して開発された全く新しい界面活性剤であり、グローバル規模での人口増加に伴い懸念される食糧問題との競合を避け、原材料不足等の諸問題を解消する技術として用途の拡大が期待できます。このバイオIOSを配合した「アタックゼロ」は、すすぎの水を減らすことができる節水型の衣料用液体洗剤であり、比較的水が豊富な地域はもちろん、渇水リスクを抱える地域に対しても貴重な水資源の保全につながると考えています。

戦略

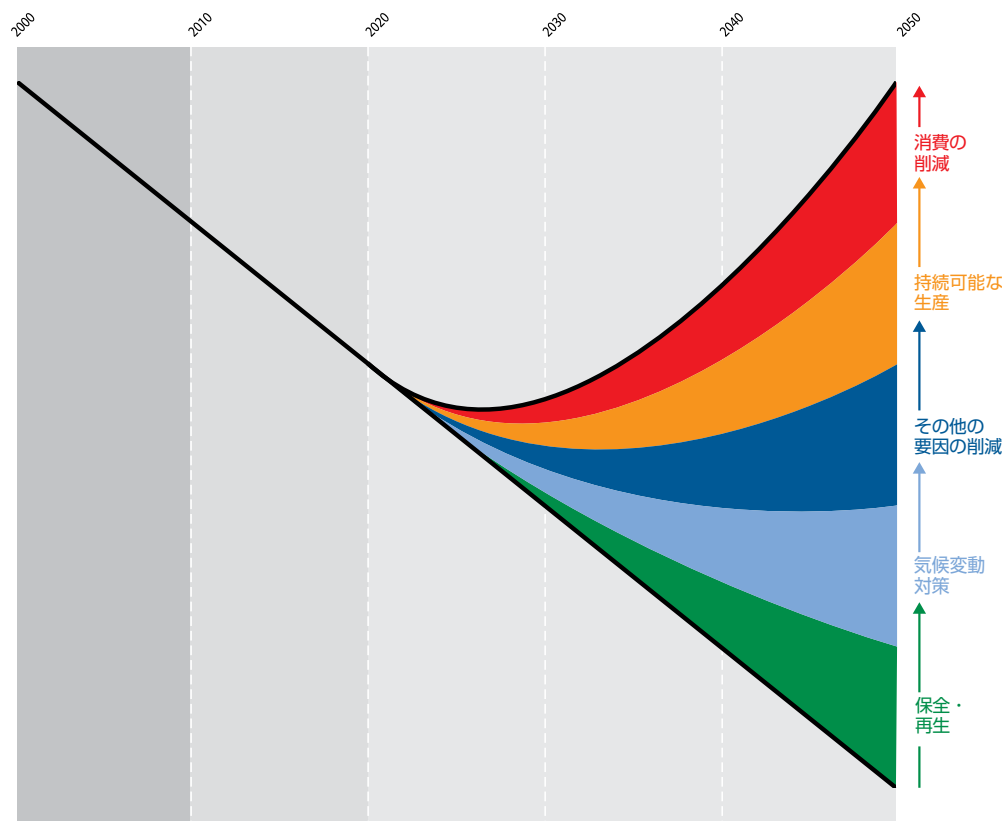
今世界は、2050年 Nature Positive をめざして、2020年をベースラインとし、以下の3つの時限目標を定めています。

- ・2020年、プラスマイナスゼロをめざす活動を開始。
- ・2030年までに、プラスの影響がマイナスを上回る状態にする。
- ・2050年までに、持続可能な状態に自然を回復させる。

花王がNature Positiveをめざす上で参考となるのが、地球規模生物多様性概況第5版(Global Biodiversity

Outlook5)に示された、生物多様性の損失を減らし、回復させる行動のポートフォリオです。

生物多様性の損失を減らし、回復させる行動のポートフォリオ



出典:地球規模生物多様性概況第5版 Global Biodiversity Outlook5(2021年3月、環境省自然環境局発行)
<https://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/library/files/gbo5-jp-lr.pdf>

生物多様性の傾向(さまざまな指標、左の軸)は衰退しており、「今までどおり」のシナリオ(傾向線)の下で低下し続けると予測される。さまざまな行動分野が生物多様性の低下を遅らせることが可能で、行動の完全なポートフォリオが組み合わせられれば、低下を止めて逆転させ(流れを変える)、2030年以降には生物多様性の純増加につながる可能性がある。これらは、下から順に:(1)生態系の保全と回復の強化;(2)気候変動の緩和;(3)汚染、侵略的外来種及び乱獲に対する行動;(4)財とサービス、特に食品のより持続可能な生産;(5)消費と廃棄物の削減。ただし、各行動領域は単独でも、または部分的に組み合わせても、生物多様性の損失の流れを変えることはできない。さらに、各行動領域の有効性は他の領域によって強化される(議論については報告書本体の第三部を参照)。

生物多様性 GRI304-2

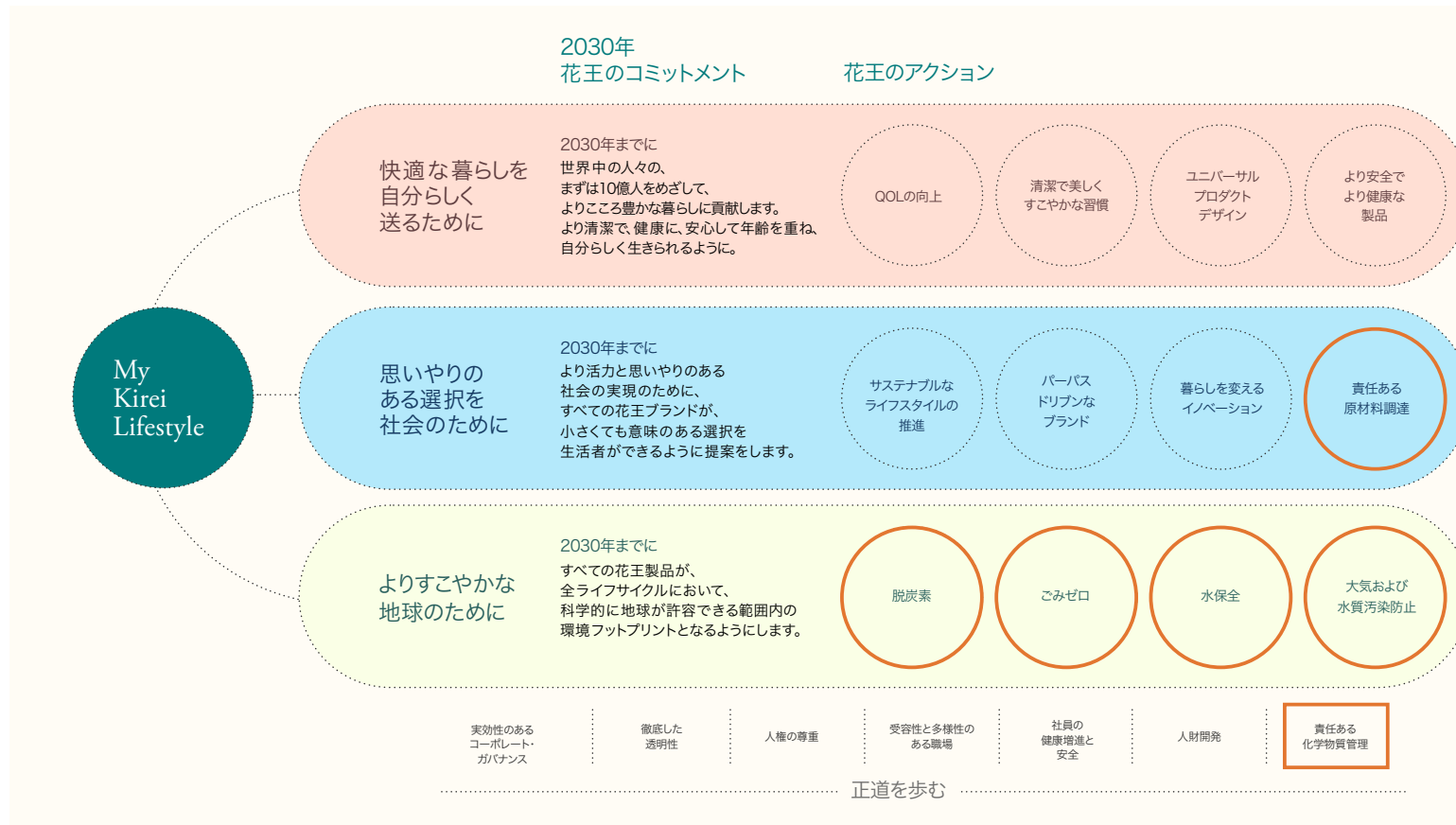
それによれば、生態系の保全と再生の強化、気候変動の緩和、汚染、侵襲的外来種および乱獲による行動、持続可能な生産、消費と廃棄物の削減、のすべてを組み合わせることで、生物多様性の回復が期待できるとされています。これらの活動は、KLPにおける「水保全」、「脱

炭素」、「大気および水質汚濁防止」、「責任ある化学物質管理」、「責任ある原材料調達」、「ごみゼロ」に関連性があると考えています。すなわち、生物多様性に関連するKLPの推進そのものが生物多様性の損失を減らし、回復させる行動につながると考えています。そして、これ

まで行ってきた拠点および地域の皆さまとの生物多様性保全の活動を続けてまいります。

後述のパーム代替え技術などは、廃棄物の削減や持続可能な生産に寄与するのはもちろん、世の中に広く普及させることで、より大きなプラスの効果をもたら

Kirei Lifestyle Plan と 生物多様性



生物多様性

GRI3-3, 304-2

することができます。

社会的インパクト

IPBES^{*}は、生物多様性の目標を達成するためには、“経済・社会・政治・科学技術における横断的な社会変容 (transformative change)”が必要だとしています。花王はESG経営において掲げたビジョンや各方針のもとに目標を定め、社会課題解決型のイノベーション技術や製品、日々の活動を通して、生物多様性の劣化防止・回復、持続可能な未来社会の実現に向かって邁進していきます。

^{*} IPBES
生物多様性および生態系サービスに関する政府間科学-政策プラットフォーム

持続可能な原材料調達に関する2025年目標の達成に向けてのさまざまなプロセスにより、原材料調達地における森林環境の維持・回復やそれによる地域社会で生活する人権の尊重につながります。

森林は、地球の気温や気候を安定させ、保水機能を有するため、災害の防波堤の役割を果たしています。食料や医薬品をはじめ、正常な水や大気など、私たちの生活に欠かすことのできないさまざまな資源と恵みが生態からもたらされ、その経済価値は数千兆円ともいわれています。

企業が原材料調達から製品の使用後に至るまで、生物多様性に配慮した製品を開発・販売し、生活者がそういっ

た商品を選ぶことにより、多くの方が生活の中で生物多様性のことをよく理解し、直接あるいは間接的に生物多様性の回復や自然の再生に貢献できる社会がもたらされます。生物の持つ生産力を考えた、持続可能なレベルでの資源利用ができれば、自然の恵みを利用しこころ豊かな生活を続けることができます。

貢献するSDGs



事業インパクト

持続可能な原材料の調達には少なからず付加的なコストが発生しますが、これは私たちの事業を持続可能なものにするために必要不可欠な投資であり、社会的責任であると捉えています。

また、欧米市場ならびにミレニアル世代・Z世代を中心に、エシカル消費の動きが活発化しており、生物多様性に配慮し、持続可能な原材料を使った商品が求められるようになってきました。原材料調達から、商品設計、使用方法、廃棄後に至るまで、花王の提供する製品に生物多様性の視点を盛り込むことは、今後ますます拡大するエシカル消費市場での存在感を高めるものと考えています。

その結果、レピュテーションのみならず、財務・非財

務の両面からメリットが生じてくると想定しています。

ガバナンス

体制

生物多様性の損失は花王をとりまく重要な社会課題のひとつです。Kirei Lifestyle Planに定めた19のアクション(KLPアクション)のうち、例えば、責任ある原材料調達、脱炭素、ごみゼロ(プラスチック削減等)、大気および水質汚染防止、責任ある化学物質管理などは、いずれも生物多様性と深く関わる活動になっています。

森林は花王の主要な原材料の供給源であるため、持続可能な原材料調達(KLPアクション「責任ある原材料調達」と関連)といった点ではもちろん重要です。また、森林は多様な生物の生息地であり、水を貯える場所であり、温暖化の原因となる二酸化炭素の吸収源でもあります。森林と共に、炭素貯蔵庫としての泥炭地を破壊しないことは、事業の継続性のみならず生物多様性と温暖化抑制(KLPアクション「脱炭素」と関連)の観点からとても重要です。

そして、製造工程での排気や排水による大気と水質汚染を防止し、製品使用後に、水と共に環境中に排出される成分などの環境への影響(KLPアクション「大気および水質汚染防止」、「責任ある化学物質管理」と関連)、不適切な処理の結果、排出されてしまったプラスチック包装容器の環境中での残留による生物と生態系への

生物多様性

GRI3-3, 404-2

影響を最小化することに取り組んでいきます。

生物多様性にはさまざまな因子が複雑に絡んでおり、これらの活動のいずれかが欠けても、あるいはまた、ある活動がほかの活動へ悪影響を及ぼすことがあっては望ましくありません。そのため、これらの活動を「生物多様性」の視点から横串で整理する必要があります。

2022年には、ESGへの取り組みを確実かつ迅速に実行に移すために、ESGステアリングコミッティが新たに設置されました。役員クラスのオーナーのもと、ESGコミッティと連動し、各部門・グループ会社に提言できる機能を持っています。特に、脱炭素、プラスチック包装容器、化学物質管理に関する課題はいずれも生物多様性に関連するテーマです。

化学物質管理コミッティの下部組織であるSAICM推進会議では、年4回の会議のうち3回、化学物質と生物多様性の関連性について議論を進めてきました。

2022年は2月～4月にかけて、「生物多様性の基本方針」の改訂に関して、ESG推進会議での事前議論を経て、ESGコミッティで審議、承認を受けました。「生物多様性の基本方針」は5月に外部公開しています。

また、レスポンスブル・ケア(RC)活動のひとつである「環境保全」においても、生物多様性保全を活動項目のひとつに定めています。生物多様性に関する方針、目標、計画を定め、活動の進捗と併せてRC推進体制で管理しています。活動の進捗については、年1回開催のRC推進委員会、日本RCミーティング、グローバルRCミー

ティング(いずれも担当役員が参加。2022年は、国内はオンラインとリアルハイブリッドでの会議、海外はオンラインでの複数エリアに分けての情報交換会を実施)において、情報共有を適宜行っています。

P18 Our ESG Vision and Strategy > ガバナンス

P285 レスポンスブル・ケア活動 > ガバナンス

教育と浸透


2011年の「生物多様性保全の基本方針」策定後に日本花王グループの全社員を対象に実施したeラーニングおよび新入社員を対象に毎年実施している環境教育等により、生物多様性について社員への基本的な周知を行っています。昨年に引き続き2022年も、主にSCM部門の現場リーダー向けの研修(国内外から参加)と、新入社員向けフォローアップ研修の場において、生物多様性に関する世界の最新動向と花王の事業活動の関わりについて学ぶ機会を設けました。海外の社員に対しては、毎年開催しているグローバルRCミーティング等を通じて情報共有や啓発等を都度行っています。

また、社内のみならず他企業、投資家との交流も重要な学びの機会として捉えています。例えば、複数の企業との意見交換や、企業と生物多様性イニシアティブ(JBIB)が主催する各種会合の場をお借りして、花王の生物多様性の取り組みを紹介し、共に生物多様性の課

題に取り組む外部有識者や他企業の方々から、ご質問やアドバイスをいただいています。

ステークホルダーとの協働

2022年6月には、調達に関する方針およびガイドラインを再編しました。すなわち、調達基本方針のもとに、「お取引先に求めるパートナーシップ要件」、「お取引先とのESG推進活動」、「ハイリスクサプライチェーンからの調達」を再編、内容の見直しを行いました。取引先と共に、サプライチェーン全体のトレーサビリティ確保や、資源保護・環境保全や安全、人権などの社会的課題の解決に貢献していきます。取引先には法令遵守に加え、「社会的責任」と「環境」への配慮を求めており、遵守する取引先から優先して調達しています。「社会的責任」と「環境」への配慮には、森林や水の保全といった、生物多様性に深く関わる課題が含まれています。

 調達基本方針
<https://www.kao.com/content/dam/sites/kao/www-kao-com/jp/ja/corporate/sustainability/pdf/procurement-policy.pdf>

パーム油・パーム核油、ならびに紙とパルプの調達においては、生物多様性の保全に配慮し、森林破壊ゼロを支持します。原産地まで追跡可能なパーム油・パーム核油の全量調達と、原料木材の原産地の追跡可能なパルプのみの購入を進めています。

パーム油の持続可能なサプライチェーンの構築をめ

生物多様性

GR13-3, 304-2

ざし、インドネシアの小規模パーム農園の生産性向上、持続可能なパーム油に対する認証の取得を支援するプログラム「SMILE」(SMallholder Inclusion for better Livelihood & Empowerment program)を進めています。

P91 責任ある原材料調達



SMILEプロジェクトの進捗ならびにグリーンバンスメカニズムの運用開始

<https://www.kao.com/jp/newsroom/news/release/2022/20220413-001/>
<https://www.kao.com/jp/newsroom/news/release/2022/20220831-001/>

花王は世界中に事業拠点を有しています。生物多様性保全についての基本的な方針は日本本社で定めていますが、生物多様性の状況や考え方は国や地域で異なるのが現状です。生物多様性保全活動を効果的に推進するためには、それぞれの国、地域において、行政、NGO/NPO、有識者など、関係するさまざまなステークホルダーと積極的に意見交換する機会を設けることが有効であると考えており、各国・地域の担当者に推奨しています。

また、各拠点において生物多様性に配慮した緑地保全活動を推進しており、社員が参加可能なイベントも用意しています。また、外部の生物多様性保全プログラムへの社員のボランティア参加を奨励しています。社員には、これらの活動への積極的な参画を通じて、生物

多様性への理解を深めてほしいと考えています。

和歌山工場にある地球環境と花王のエコ技術の発信基地、エコラボミュージアムでは、未来を担う小学生を中心に地域密着型の啓発活動を行っています。併設された温室では、ヤシなどが育つ南国の高温多湿な気候が再現されており、約60種の植物を見ることができます。

リスク管理

花王が調達する原材料の中から、ビジネス(購入金額等)、ESG(生物多様性等)とエリア(保護地域、人権問題等)の視点から、課題が大きなサプライチェーンとしてパーム油や紙・パルプを「ハイリスクサプライチェーン」として特定し、「ハイリスクサプライチェーンからの調達」に基づいた持続可能な調達に取り組んでいます。原産地での森林破壊ゼロをめざしています。NDPE^{※1}を支持し、サプライヤーならびにサプライヤーのグループ企業に対してNDPE方針、HCSA^{※2}の考え方の遵守を要求しています。現場での対話を通じてリスクを把握し、課題の本質を見極め、取引先やNGOと解決に向けて取り組み、進捗を公表していきます。この活動は、KLPにおける「責任ある原材料調達」に関するもので、購買部門が主管となって活動を行い、経営会議を通して取締役報告に報告がなされています。

※1 NDPE
No Deforestation, No Peat and No Exploitation(森林破壊ゼロ、泥炭地ゼロ、搾取ゼロ)

※2 HCSA
High Carbon Stock Approach(高炭素貯留アプローチ)

P91 責任ある原材料調達

目標と指標

中長期目標と2022年実績

花王は、企業理念である花王ウェイに、豊かな共生世界の実現を私たちの使命として定めています。生物多様性の視点から見た共生とは、自然の生産・再生能力を超えることなく、自然への依存と影響を最小限に抑え、人と社会、地球に対する価値を最大化することであると考えています。

生物多様性の恵みが持続する社会形成

花王は、主要原材料であるパーム油や紙・パルプに関して、原産地の森林破壊ゼロの確認やトレーサビリティの確保等に関する目標を掲げており、その達成に向けて、森林破壊リスクのマッピングやハイリスクと判断された工場の調査などの具体的な活動を推進しています。2020年に大手プランテーションまでのトレーサビリティ確認を完了し、2025年までに小規模パーム農園までのトレーサビリティ確認を完了することを目標にしています。

森林破壊や人権侵害等のない持続可能な原材料の生

生物多様性 GRI304-2

産、調達体制を確立し、すべてのステークホルダーに対して生物多様性の恵みが永続的に得られる社会の形成に貢献していきたいと考えています。

製品が生物多様性へ与える影響の最小化

花王は、原材料の調達と活用、製品開発、廃棄後の環境への影響など、事業活動のすべての工程において、生物多様性への影響が最少化することをめざしています。

パーム(核)油は花王の製品の多くに使用されていますが、グローバル規模での人口増加によって今後需要がますます高まることが予測されており、森林破壊や原材料不足が懸念されます。そこで花王はパーム(核)油の代替として、天然系でかつ非可食系の油脂源を利用する技術開発を継続しています。花王はすでに、これまで活用が難しかった油脂原料を界面活性剤として活用できる「バイオIOS」を開発し、衣料用洗剤に活用しています。2022年はバイオマス残渣であるキャッサバ残渣を利用して、非可食バイオニオン活性剤の製造をめざす実証研究への取り組みを開始しました。また、高効率で油脂原料を生産可能な微細藻類の開発などを行っています。

また、製品使用後に、水と共に環境中に排出される成分の影響(量と質)を最小化し、すでに排出されてしまったプラスチック包装容器と海洋プラスチック問題の解決にも取り組んでいます。

バリューチェーン全体での生物多様性への影響評価

2021年には、自然資本分野の国際金融業界団体「Natural Capital Finance Alliance(NCFA)」の主導のもと公表された、リスクアセスメントの評価ツール(ENCORE: Exploring Natural Capital Opportunities, Risks and Exposure)を用いて、自社の自然資本への依存および影響因子の抽出を行いました。得られた因子の中には、国際的に統一された評価方法が定まっていない項目もあり、全体を一定の定量性を持って評価することはまだ少し時間が掛かります。しかし、自社のバリューチェーン上で注目すべき自然資本とホットスポットが定性的にでも示されたことにより、自社の活動の優先順位づけがしやすくなりました。

今年度は、花王の主力商品である洗浄剤をモデルに、他社ベンチマークと各種ガイドライン、レポート等の追加調査、地理情報システムツール(GIS: Geographic Information System)を用いて、バリューチェーン上のホットスポットを特定しました。

生物多様性の主流化

他社との協働として「持続可能なパーム油ネットワーク(JaSPON)」での持続可能なパーム油の調達・消費の促進、そのほか、拠点の緑地保全活動や社外の生物多様性保全活動への社員参画促進など、多様な活動を推進して生物多様性の主流化に寄与しています。

また、企業と生物多様性イニシアティブ(JBIB)や経

団連のポスト2020生物多様性枠組みワーキンググループ等に参加し、最新の国際動向の把握や他企業との連携、情報共有を進めています。

生物多様性や自然と企業活動に関する情報公開の動きも活発化しています。2022年4月よりTNFD^{*}フォーラムに参加して情報収集すると共に、TNFDより公開されるβ版へのフィードバックを行っています。TNFDはオープンイノベーション型でフレームワークを開発しているため、開示体である企業からのフィードバックを積極的に行うことで、実情に合った使いやすいフレームワークとなる可能性があります。また、TNFDコンサルティンググループ(TNFD日本協議会)に加入し、情報収集ならびに国内企業との意見交換を進めています。得られた知見は社内関係部署と共有し、世界レベルに合わせた活動にいち早く取り組めるよう努めています。

※ 自然関連財務情報開示タスクフォース(TNFD: Taskforce on Nature-related Financial Disclosure)

2022年の実績

新たな試み

花王における生物多様性に関するマテリアリティの特定

2021年は、リスクアセスメントの評価ツールENCOREを用いて、花王の自然資本への依存および影響因子の抽出を行いました。

花王の事業活動は、原材料としてパーム(核)油やパルプを使い、パーム油をもとに界面活性剤を獲得、各洗

生物多様性 GRI304-2

浄製品に処方されています。また、製品使用後は、使用した水と共に環境に排出され、一部包装容器は不適切に処理され、環境中に排出されます。そのため ENCORE からは、パームやパルプに由来する因子や、製品排出後の生態系への影響、温室効果ガスや廃棄物等が抽出されてきました。

2022年は、TNFDのLEAPアプローチに沿う形で花王の主力製品である洗剤を例に、バリューチェーン全体の解析を進めました。上流、直接操業、下流それぞれで重要課題を特定し、それぞれの重要課題に対して、各種ツールを組み合わせることでマテリアリティを特定しました。

継続的な活動実績

1. 持続可能な原材料調達の推進

パーム油・パーム核油、紙とパルプの調達に関して、トレーサビリティの確認を進めています。

また、RSPO 認証油の調達比率を高める活動や小規模パーム農園に対するRSPO 認証取得支援を継続しています。

2. 地域の生物多様性に配慮した事業活動・社会活動の推進

2020年より続いている新型コロナウイルス感染症の影響もあり、活動制限を余儀なくされる中で可能な範囲内での活動を推進しました。

3. コピー用紙削減

日本における一人当たりの印刷枚数は前年比93.6%となり、目標(前年以下)を達成しました。

4. グリーン購入の推進

日本におけるグリーン購入率は93.0%でした。

2023年の目標

生物多様性に関する年次目標は、1年間の活動単位でPDCA管理しているRC目標の中で毎年定め、進捗管理しています。2023年目標は以下の通りです。

1. 持続可能な原材料調達の推進

P91 責任ある原材料調達

2. 地域の生物多様性に配慮した事業活動・社会活動の推進

2018年～2019年にかけて実施したグループ全生産拠点の生物多様性評価の結果を受けて、各拠点で実情に即した生物多様性保全活動を個別に計画し、推進します。

3. コピー用紙削減

全社員が共通で取り組むことのできる活動として、コピー用紙の削減活動を日本花王グループから開始し

ています。2021年以降はグローバルで活動を推進し、ひとり当たりの印刷枚数を前年以下にすることを目標としています。

4. グリーン購入の推進

環境負荷ができるだけ小さいものを優先して購入する「グリーン購入」を推進しています。グリーン購入法を受けて、以前から活動を推進している日本における2023年目標は、グリーン購入率100%です。

2022年実績に対する考察

地域の生物多様性に配慮した事業活動・社会活動については、担当者や参加者の強い熱意によりグローバル各社で継続的に推進されています。生物多様性の活動は継続することに意味がありますので、担当者や組織が変わっても活動が途絶えることのないような仕組みの構築や文化の醸成が必要だと考えています。

コピー用紙削減については、出社勤務が戻りつつあるものの、利用者の積極的な推進により、毎年着実に使用量を減らしています。


グリーン購入の推進については、残念ながら前年より購入比率が低下し、目標の100%達成に至りませんでした。購入者の環境意識の向上に努めると共に、グリーン購入法適合品を購入する仕組みそのものの見直しも検討していきます。

生物多様性 GRI304-2

主な取り組み

事業と生物多様性の関わりの把握

2013年に評価を完了したエコロジカル・フットプリントでは、花王の事業活動が及ぼす環境負荷は、二酸化炭素吸収地、油糧植物生育のための耕作地や牧草地、パルプや紙の生育のための森林、界面活性剤が影響を与える漁場などが大半を占めていることを確認しました。

 企業活動のエコロジカル・フットプリント
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ilcaj/2011/0/2011_0_164/_pdf

2021年は、ENCOREを用いて、自社の自然資本への依存および影響因子の抽出を行い、依存因子として5個、影響因子として9個の因子を抽出しています。それぞれパームやパルプに由来する因子や、製品排出後の生態系への影響、温室効果ガスや廃棄物等に由来する因子であることを明らかにしてきました。それぞれの因子に対して、リスク/機会分析や気候変動シナリオ分析を行い、花王の事業活動に対する財務影響の見積もりを進めています。しかしながら、事業全体を視野に入れた分析を行ったため、カバーする範囲は広いものの、各課題の深掘りという意味では十分ではありませんでした。

そこで2022年は、TNFDのβ版によって提案されたLEAPアプローチ※1に可能な限り従い、花王の主力商品である洗剤を例にとって、事業と生物多様性の関連性について深掘りを行いました。

2021年の分析結果に最新の他社ベンチマークと各種ガイドライン、レポート等を追加調査し、課題を再設定しました。そして、それぞれの重要課題に対して、地理情報システム※2ツール(GIS:Geographic Information System)を重ね合わせ、ステークホルダーの関心軸と花王における事業活動への関心軸で整理しました。その結果を以下に示します。

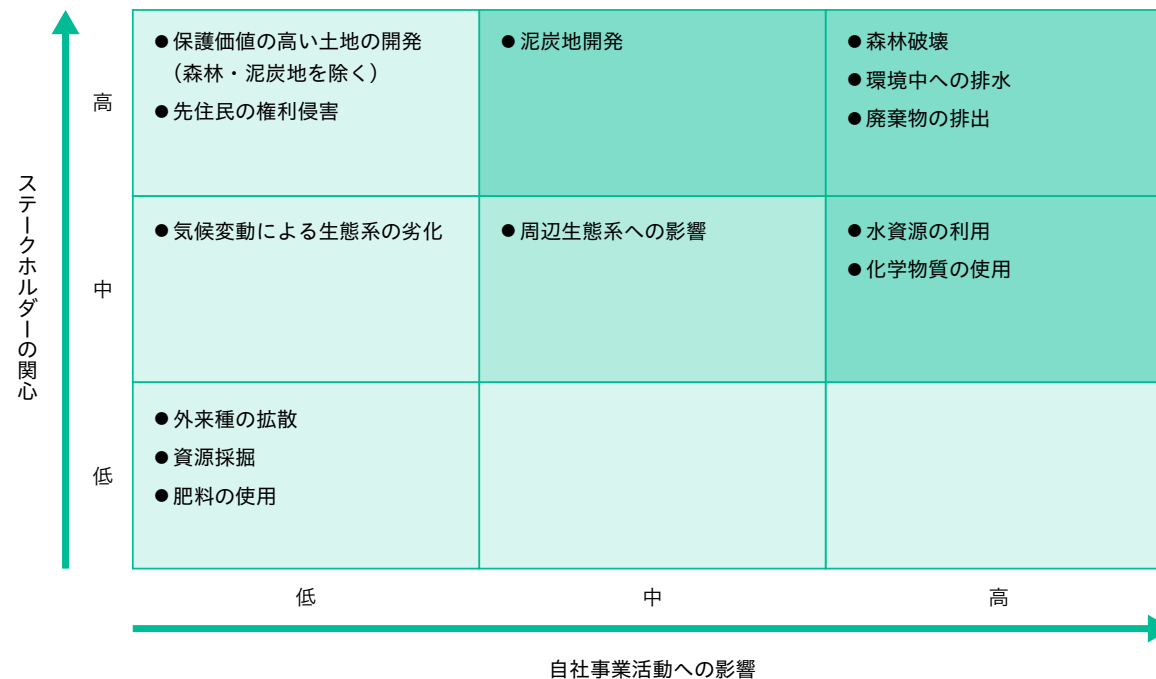
※1 LEAP(Locate, Evaluate, Assess, Prepare) アプローチ
 ※2 地理情報システム(GIS:Geographic Information System):地理的位置を手がかりに、位置に関する情報を持ったデータ(空間データ)を総合的に管理・加工し、視覚的に表示し、高度な分析や迅速な判断を可能にする技術

洗剤におけるLEAPアプローチの取り組み事例

Locate:自然とのかかわりあいを見つける

花王の主力商品である洗剤を例に、2021年の

生物多様性に関するマテリアリティの特定(縦軸と横軸は相対的なもの)



生物多様性 GRI304-2

ENCORE 解析の結果に追加調査を加え、花王における生物多様性リスクとして13の課題を設定しました。分析の結果、ホットスポットとして、パーム(核)油の原産国、水ストレスや水質汚染を抱える地域にある拠点および販売国が挙がってきました。

Evaluate: 依存と影響を評価

上記13の課題に対して、すでに顕在化しているリスクのほか、潜在的リスクの有無に加え、GISデータを用いた解析を行いました。

バリューチェーン上流ではパーム(核)油の原産国における「森林破壊」と「泥炭地開発」に関すること、直接操業過程では「水利用」と「排水」に関わること、下流では製品使用時の「水使用」、使用後の家庭からの「排水」「化学物質管理」、プラスチック容器に代表される「廃棄物の排出」が自然に対する依存や影響といった面から、事業リスクにつながる課題として抽出できました。

Assess: リスクと機会の特定

ステークホルダーの関心軸と花王における事業活動への関心軸の2軸を使って、各課題の重要度の相対的な序列づけを行いました。

その結果、最も重要な課題として、「森林破壊」「環境中への排水」「廃棄物の排出」が抽出されました。

「廃棄物の排出」に関しては、花王の販売国のうちインフラ整備がまだ十分整っていない国々、例えばアジア

の一部の国でのリスクが想定されます。これら課題への対策と応用展開が機会を生むと考えています。

Prepare: リスクと機会への対応と報告

「森林破壊防止」に向けて、森林フットプリントの導入、調達するパーム(核)油の100% RSPO 認証油化、小規模パーム農園までのトレーサビリティ確認の完了をめざしています。また、インドネシアの小規模パーム農園支援プログラム SMILE を実施しています。

「環境中への排水」対策として、各拠点での規制の遵守を行いながら、規制値よりも厳しい自主管理の設定を進めています。また、家庭での排水対策としては、例えば泡切れがよくすすぎ水が少なく済む洗浄剤の提供などを行っています。そして、新たな環境評価手法としての環境 RNA による生体評価技術の開発も進めています。

また、昨今注目されているプラスチック廃棄物に関しては、プラスチック使用量の削減の継続・強化、リサイクル樹脂の活用、プラスチック容器の回収とリサイクル技術の確立に取り組んでいます。

今回の分析を行っていた段階では、TNFD におけるシナリオ分析や開示要件は開発途上であったため、今回の分析にはあまり盛り込むことができず、対応できた範囲での結果の一例となっています。今後のTNFDの完成を待って、さらなる分析を進めてまいります。

事業が生物多様性に与える影響の低減

花王の事業活動が生物多様性に与えるさまざまな影響を低減するために、以下の活動を継続的に行っていきます。いずれも花王のESG戦略における重要な活動であり、詳細は本レポートに掲載しています。

- ・原材料使用量の削減および持続的に調達可能な環境負荷の少ない原材料への切り替え

P91 責任ある原材料調達

- ・事業活動に伴うCO₂排出量の削減

P102 脱炭素

- ・水資源の使用量削減および影響の低減

P137 水保全

生物多様性

・「責任ある化学物質管理」の推進

科学的根拠に基づくリスク評価とライフサイクル全体を通じた適切な化学物質管理により、化学物質による環境ならびに生態系への負荷を最小化するモノづくりを進めています。

生物多様性の恵みを大切に、最小限の使用量で最大限活用するための技術開発

花王は長年にわたり、アブラヤシの実などから採取できる炭素数が12～14の油脂原料を用いて工業用高級アルコールを生産し、さまざまな家庭用製品の原料として使ってきました。炭素数12～14の油脂は、世界の油脂生産量のうちのわずか5%を占めるに過ぎません。残り95%は炭素数16～18の油脂になります(Oil World Annual 2016)。炭素数16～18の油脂には、食料用途には適さない固体部分が含まれており、この固体部分はこれまで用途が限定されていました。そこで花王は、界面科学や界面活性剤の合成技術を適用することで、「バイオIOS」という、品質の高い界面活性剤を生み出しています。「バイオIOS」は、2019年より衣料用濃縮液体洗剤「アタックZERO(ゼロ)」で実用化されています。

今後の人口増加に伴う食糧需要の増加に伴い、パーム(核)油の需要が増大する可能性があります。需要の伸びに応えようとして森林を破壊しパームプランテーションに転換するのは、生物多様性の意味でも、GHG

吸収源としての森林を失うという意味で気候変動の面からも好ましくありません。

そこで花王は、森林を破壊することなく界面活性剤の原料であるパーム(核)油の需要増大に対応する方法として、パーム(核)油代替材料の開発を進めてきました。

2022年は非可食のバイオマス残渣であるキャッサバ残渣から非可食バイオノニオン活性剤の製造をめざす実証研究についての取り組みを開始しました。花王の有する酵素ならびに酵素の製造技術を活かし、キャッサバ残渣をケミカル材料の原料である糖に効率よく分解することができるようになりました。また、同じ工場の敷地内で酵素の生産から糖化处理を行うことで、輸送によるCO₂の発生を抑制することをめざしています。

さらに、将来的に向けた技術として、環境負荷が少ない藻類が産生する油脂をパーム油の代替とする研究も進めています。

これまで用途が限られていた原料を界面活性剤の新たな原料にできたこと、食品用途と競合しない油を活用する可能性を広げたことは、「生物の多様性の持続可能な利用」への貢献につながるものと考えています。

また、花王は30年以上にわたって酵素などタンパク質の研究開発を行っており、それらを菌などの微生物を使って効率的に生産する技術の開発にも取り組んできました。その中のひとつに、枯草菌を活用したタンパク質生産技術があります。この技術は、2020年5月に発表された、北里大学、株式会社 Epsilon Molecular

Engineering(EME)との共同研究による、新型コロナウイルス中和能を持つVHH抗体取得にも貢献しています。その後の研究成果で、ハムスターモデルにおいて、取得したVHH抗体を経鼻投与することにより、新型コロナウイルスの肺におけるウイルス増殖を抑制できることがわかりました。さらに新型コロナウイルススパイクタンパクとVHH抗体の結合様式を明らかにしました。これらの結果は、VHH抗体が新型コロナウイルス感染症の治療薬となりえる可能性を示しただけでなく、経鼻投与という新たな投与方式により治療の選択肢を広げる可能性を示しています。

また花王は、生物多様性評価のための高精度な生態調査方法を確立するため、環境中に含まれる生物のRNA(環境RNA)の研究に取り組んできました。DNAよりも分解されやすいRNAを指標とすることで、その場にはない生物を誤検出してしまうことが少なく、生活排水の影響を受けにくいこともわかってきました。このたび、河川水中の魚のRNAを網羅的に解析する手法に加えて、水質の評価指標となる節足動物(水生昆虫)や藻類に対する評価法を構築することができました。これらの研究成果により、生体を捕獲することなく、生態系の真の姿を高精度で可視化できる可能性があります。

これらの技術の活用により、人為的活動による生物多様性の損失を最小化することで、社会と環境のサステナビリティに貢献することをめざしています。

生物多様性

P83 暮らしを変えるイノベーション



新型コロナウイルス感染症(ハムスターモデル)の治療に成功
VHH抗体の経鼻投与法により臨床応用に大きく前進
<https://www.kao.com/jp/newsroom/news/release/2021/20211116-001/>

魚のRNAが河川水中に豊富に存在し、生態調査に有用であることを発見
<https://www.kao.com/jp/newsroom/news/release/2021/20210817-001/>

国際的な取り決めの遵守

花王は、生物多様性条約、生物多様性条約締約国会議等で決定された生物多様性に関する国際的な取り決めおよび関連する各国・地域の国内法を遵守しつつ、事業活動を進めています。

また、花王は、2014年、「原材料調達ガイドライン」の中で掲げた調達目標において日本でいち早く「森林破壊ゼロ」の支持を表明し、また、同年9月にニューヨークで開催された国連気候変動サミットで発表された「森林に関するニューヨーク宣言」にも署名しました。

また、遺伝資源を利用する場合は、ABS※の動向に十分配慮し、遺伝子組換え生物の利用については、カルタヘナ議定書を遵守し、適切な利用と管理を行っています。

今後は、2022年12月に国際合意がなされた昆明・モントリオール生物多様性枠組で定める目標の達成に向けて貢献していきます。

※ ABS: Access to Genetic Resources and the Fair and Equitable Sharing of Benefits Arising from their Utilization (遺伝資源へのアクセスとその利用から生じた利益の公正かつ衡平な配分)の略称。

パーム油に関する取り組み

花王にとって最も重要な自然資本のひとつであるパーム(核)油に対し、社会・環境の面における本質的な課題解決に向けて取り組んでいます。

ひとつは、持続可能な生産と生産性向上に関する教育とRSPO認証取得に向けた支援になります。2022年中に約600農園がRSPO認証を取得予定であり、花王は認証を取得した小規模パーム農園が販売するRSPO認証クレジットの全量購入を予定しています。

また、土壌への過剰な施肥は、土壌汚染や水質汚染、土中生態系の変化の原因となります。そこで、農園の生産性の向上と、農薬使用量の低減による収益改善や、過剰な施肥を防ぐことによる環境負荷の低減を目的とし、農薬が植物表面で濡れ広がるようにさせる薬剤「アジュバントシリーズ」を無償で提供し、使用方法の指導も行っています。

また、昆明・モントリオール生物多様性枠組の目標の中には、生物多様性に関する意思決定に、現地に住む人々の意見を加味することが謳われています。2022年9月に開始した、インドネシアの小規模パーム農園を対象としたグリーンバンスメカニズムも貢献できるものと期待しています。小規模パーム農園の人権に関する課

題に対して、ビジネスと人権を専門とするNPO法人経済人コー円卓会議日本委員会(CRT日本委員会)と協働で、グリーンバンスメカニズムの運用を開始しました。スマトラ島の約50の農園からスタートし、順次対象農園を増やす予定です。また、問い合わせ内容や対応の結果は、花王ウェブサイトでご公表していきます。

P91 責任ある原材料調達



SMILEプロジェクトの進捗ならびにグリーンバンスメカニズムの運用開始
<https://www.kao.com/jp/newsroom/news/release/2022/20220413-001/>

<https://www.kao.com/jp/newsroom/news/release/2022/20220831-001/>

生物多様性

GRI304-1, 304-2, 304-3

地球の生態系に配慮した事業活動

花王では、地域の生物多様性に配慮した自社緑地や地域貢献活動に積極的に取り組んでまいりました。日本には、生物多様性への配慮を求める企業緑地に関する認証システムが複数存在しており、花王においても以下の工場・事業場が認証を取得しています。

和歌山工場：SEGES「Excellent Stage1」認定(2005年)、「Superlative Stage」認定(2017年)



緑の認定 SEGES 認定サイト:そだてる緑:花王株式会社 和歌山工場
<https://seges.jp/site/A0509.html>

鹿島工場：ABINC 認証(2015年取得、2018年・2021年更新)

川崎工場：ABINC 認証(2018年取得、2021年更新)

小田原事業場：ABINC 認証(2020年取得、2023年更新)



第10回いきもの共生事業所® 認証施設
<https://www3.abinc.or.jp/facility/10th-creature-facilites/>

第13回いきもの共生事業所® 認証施設
https://www3.abinc.or.jp/facility/13th_creature_facilites/

各工場は、認証取得以降も、さらに緑地の保全活動を継続、深化させてまいりました。和歌山工場はSEGES※1の認定レベルとして5段階評価における最高位である「Superlative Stage」を取得し、これを維持しています。また、鹿島工場は2018年、2021年に、川崎工場は2021年

に、小田原事業場は2023年にABINC※2認証を更新しています。

※1 SEGES (Social and Environmental Green Evaluation System; 社会・環境貢献緑地評価システム)
 企業等によって創出された良好な緑地と日頃の活動、取り組みを評価し、社会・環境に貢献している、良好に維持されている緑地であると認定する制度。

※2 ABINC (Association for Business Innovation in harmony with Nature and Community: 一般社団法人 いきもの共生事業推進協議会)
 いきものと人が共生できるしくみを「創造」し、科学的・技術的に「検証」し、「事業化」を推進することを目的とする団体。

グローバル共通の生物多様性評価基準に基づく活動推進

一方、日本以外で花王の生産拠点がある国では、私たちの知る限り、企業緑地を対象とした認証システムは存在しないのが現状です。そこで、花王では、事業を展開しているグローバル各拠点において、地域の生物多様性に配慮した活動がどの程度行われているか評価するための生物多様性評価指標を2017年に導入し、2018年から2019年にかけて、新たに花王に併合した拠点を含むすべての生産拠点における評価を実施しました。生物多様性視点での課題を明確にでき、活動を推進することでスコアを向上することができるため、活動進捗の確認が容易になります。

本評価を導入した一番の目的は、現状を把握した上で、社員が明確な目的意識を持って自拠点あるいは近隣の緑地等における生物多様性保全に積極的に取り組むことにより、自拠点が恩恵を受けている地域生態系の生物多様性保全に貢献することです。

地域住民など関係する多くの皆さまにも私たちの思いが伝わり、活動の輪が大きく広がっていく「生物多様性の主流化」につなげていければと考えています。

川崎工場

緑地の生物多様性調査と保全の実施

常緑樹を中心としたまとまりのある緑地(写真上)が社員の癒し空間となっており、2017年から緑地に生息する生き物の調査を継続していますが、年々その種類が増えています。これまでに472種(植物286種、昆虫151種、鳥類23種、ほか12種)の生き物が確認でき、2022年調査では2年前より58種も増えました。その中でも重要種の「カワラヒワ(鳥類)」と「クズハキリバチ(昆虫類)」が確認できたことは嬉しい驚きでした。今年もジャコウアゲハの繁殖保護エリアに生息するウマノズクサを食べる幼虫も確認できました(写真下)。ウマノズクサ生態は4地点から9地点へ拡大したこともあって、沢山のジャコウアゲハが舞っていました。長引く新型コロナの影響で生物多様性関連イベントはしばらくできていない状況ですが、各職場での緑化清掃や花壇活動、社員への定期的な情報発信などを継続的に行っています。その他、枯れ木や剪定・伐採後の枝や木からつくったウッドチップを緑地内歩道に再利用したり、弱っている樹木への農薬液の樹幹注入なども行っています。

「場内緑地の整備を通じた生物多様性保全活動」を含む4分野でSDGs達成に向けた取り組み・宣言が認められ、

生物多様性 GRI304-1, 304-2, 304-3

2021年7月に「かわさきSDGsゴールドパートナー」の認証を受けています。今後も緑地の維持に努めつつ生き物と人との共生を図り、地域生態系への貢献と社員の癒し空間の維持・向上を推進していきます。



小田原事業場

ABINC 認証の更新

小田原事業場内には約9,000m²の緑地があり、植栽樹木のうち90%以上が在来種です。2018年より地域の生物多様性への配慮という観点で生物多様性保全活動を開始しました。ABINC 認証を2020年2月に獲得後も、従来の活動維持と新たな取り組みを行ってきました。2022年8月に更新審査を通り、新たに認定書が発行されました。ストロングポイントに挙げられた主な活動は以下のとおりです。

小田原市が取り組む酒匂川水系メダカ(小田原メダカ)保護のための里親制度に2018年に登録し、市より5匹のメダカを迎えました。2019年には卵からの孵化に成功し、25匹まで増加しました。2020年以降は場内の建物に設けた広いベランダに新たに設置したメダカ池で育成を行い、現在は約130匹になっています。2023年には小田原市に帰す予定です。同ベランダには屋上緑地を整備しており、現在ジャコウアゲハの育成にも取り組んでいます(以上、写真左)。

また、小田原事業場の中央に配置した緑地帯(アークスクウェアガーデン)に位置する東屋横に生物が棲みやすい水辺環境を2022年に新たに整備し、ヤゴ等の水生生物を確認しています。場内の間伐作業時に発生した樹木の枝は積み上げて生物の隠れ家とし、あるいはチップにし敷き詰めてカブトムシの幼虫等が育つ環境を整備しました(以上、写真右)。



酒田工場

「やまがた絆の森協定」に基づく保全活動

花王酒田工場は、2021年7月に山形県、酒田市と森づくりに関する「やまがた絆の森協定」を締結し、酒田工場から北に約1kmのところにある庄内海岸クロマツ林3.4ha(酒田市大浜地区)を「花王の森 おおはま」と名づけ、活動地としました。このクロマツ林(飛砂防備保安林)は、江戸時代の商人や農民が砂飛びを防止するために植林を進めたといわれています。公益の森の歴史を持つクロマツ林を未来に引き継ぐため、飛砂防備保安林としての機能維持、クロマツの育成によるCO₂削減、社員による社会貢献活動、活動を通じての社員の環境意識向上等を協定締結の目的に挙げています。

2022年6月25日、「花王の森 おおはま」に花王酒田工場と花王グループカスタマーマーケティング東北の社員40名が集まり、雑木の撤去、下草刈り、階段に溜まった砂の除去、ごみ収集などの作業を行いました。また、10月15日には27名が集まり、クロマツに張り付いたツタの除去や階段の清掃等を実施しました(写真上下)。本活動地に

生物多様性 GRI304-1, 304-2, 304-3

は住宅地から海側に抜ける遊歩道があり、ウォーキングをされている方がおられるため、歩きやすくすることで安全に健康増進ができ、また綺麗に整備することで不法投棄の防止策につながることを期待しています。また、この豊かな森林資源を地域の子どものための環境学習の場として活用し、親しんでもらうことで、森林維持の大切さを次世代に伝えていければと考えています。



花王台湾

工場緑地の生物多様性保全活動

花王(台湾)では生物多様性保全に関連する以下の活動を行っています。

- 家具等の再生木材を用いて鳥の巣や教育機能を兼ね備えた昆虫ホテルを製作し、工場の緑地内、既存の水域付近にそれぞれ設置することで、生物の隠れ場所や繁殖地を提供しています(写真下)。2022年はオーバーホールを実施しました。最近では、タイワンゴシキドリ (Psilopogon nuchalis、台湾固有の鳥類)が営巣のため定期的に巣箱を訪れており、昆虫ホテルにはアリ、水域には両生類の繁殖を確認しています。
- 生物モニタリング活動により、場内に生息する生物種(哺乳類、爬虫類、両生類、昆虫)について大まかに把握しています。来場者や従業員に理解してもらうため、緑地付近に鳥類や植物の説明板を設置しました(写真右)。将来的には、新入社員や来場者に対する環境教育も実施したいと考えています。



KSA

在来の野生植物の植樹エリア拡張計画

花王スペシャルティーズアメリカズ(KSA)は、米国南部のノースカロライナ州ハイポイント市に位置しています。針葉樹と広葉樹の多様な樹木で構成される混交林が敷地全体に広がっています。2019年に生物多様性に関するアセスメントを実施し、絶滅危惧種を含むさまざまな生物が敷地内に生息していることがわかっています。

以降、KSAは生物多様性保全活動を本格的に推進しており、従業員も積極的に参加しています。2021年には、従来の生物多様性保全活動に加え、「2025年までにKSA敷地内に1,000m²(10,764平方フィート)相当の在来種の野生植物を植える」という活動目標を設定し、その実現に向けた活動を開始しました。この活動の主

生物多様性 GRI304-1, 304-2, 304-3

な目的は以下の通りです。

- ・ミツバチや蝶などの花粉媒介者の生息地の提供
- ・従来の芝地を花の咲く草地に転換することによる芝刈りや必要燃料の削減

2021年11月、KSAの従業員は、地元の種子農場から入手した米国南東部に生息する野生の花の種を220m²に蒔きました。2022年8月から9月にかけて、これらの植物が色鮮やかに花を咲かせたことで、さまざまな昆虫が集まり、また従業員や配達ドライバーの目を楽させています(写真下)。2022年4月にも、40名以上の従業員が同じ種子農場から223m²の野草の種を植えました。成長した苗木は地元の渡り鳥のガンにほとんど食べられてしまいました。そこで、植栽を秋のみの実施とし、さらに問題を軽減するために有益な被覆作物を含めるように変更しました。

10月、従業員は、自ら購入したノースカロライナ原産の植物を植樹(90m²の新しい苗床を追加)する毎年恒例のプログラムを継続しました。今年24名の従業員が参加し、新たに10本の苗を植えると共に、既存の植栽の手入れを行いました(写真右)。




他団体との連携

花王は、2008年の発足当初から一般社団法人企業と生物多様性イニシアティブ(Japan Business Initiative for Biodiversity:JBIB)に参画しています。JBIBは生物多様性保全の取り組みについて真剣に考え、具体的な活動を実践する異業種の企業の集まりであり、テーマごとに複数のワーキンググループに分かれ、企業がどのような形で生物多様性の保全や回復へ貢献できるのかについて議論を行っています。今年度はCOP15、TNFD、SBT for Natureなど、さまざまな国際枠組みをまとめる動きが加速しており、JBIB内の活動を通して国際動向の入手や意見交換を行っています。

また、昨年より経団連のポスト2020生物多様性国際枠組ワーキンググループに参画してきました。ここでは、ポスト2020生物多様性国際枠組の内容およびそれに基づいて設定される日本の国内政策に対して、事業活

動に与える影響や課題、要望事項に関する議論、提言を行っています。

また、2022年4月よりTNFDフォーラムに参加し、TNFDより公開されるβ版へのフィードバック、ならびに情報収集を行っています。併せて、TNFDコンサルティンググループ(TNFD日本協議会)に加入し、TNFDの開発状況の把握、他企業との情報交換を行っています。

 TNFDフォーラム
<https://tnfd.global/about/the-tnfd-forum/>

